

科目名称		体育・スポーツ文化論Ⅱ		(担当教員名： 有山篤利 )	
課 程	： 学部4年次	開講学期	： 後期		
授業形態	： 講義・演習	授業規模	： 30人以下		
インタビュー対象教員名 有山篤利 (実施日時：7月9日(木)10時40分～12時10分；実施場所：総合研究棟3階小会議室)					
インタビュー対象受講者名 壺阪圭祐 (実施日時：7月10日(金)13時10分～13時40分；実施場所：総合研究棟3階小会議室)					
選定理由					
<p>本科目は、スポーツを「文化」として捉える視点を持ち、その上で、現代の体育・スポーツのあり方を社会的、経営学的、哲学的等の多様な観点から批判的に検討しつつ、未来の体育授業を構想していく力を養うことをねらいとしている。そのために授業者は、対話を中心においた「構成主義的な学習観」を明確に意図した授業づくりを行っている。それは、テーマについて学生同士、学生と教員が互いに考えを出し合い、触発し合いながら意味を創出しつつ学んで行くものである。そこでは向かうべき方向性はあるが、ゴールや正解を立てない。こうした指針が、単なる知識伝達ではない主体的・相互的な学び、つまりアクティブ・ラーニングの基盤となっている。</p> <p>小人数授業の利が十分に活かされた本授業の特長を以下に述べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 学生の自由な発話を促す教員のオープンな姿勢 授業の導入時に教員は、「自分は知っていることは質問しない」「自分もわからないことを聞くので自由に答えて欲しい」と宣言し、実際に授業期間を通して専らオープン・クエスチョンを投げかけ続けた。また学生のどのような意見に対しても「一度体を通す」「学生たちの意見を聴いた上で最後に自分の考えを述べる」ような受けとめ方によって、学生が自らの考えを自由に述べることを促す場づくりを行っていた。学生の「初めから授業のイニシャティブが学生の側にあった」というコメントからも、学生主体が保障されていたことがうかがわれる。</li> <li>● 議論の中で自然に発生した知的関心の文脈に沿ったテーマ設定 授業の中盤以降は、学生があるテーマについて調べて発表し、それを受けて全体で議論する授業形態になったが、そのテーマは予め用意されたものでなく、議論の中で自然に浮かび上がってきたトピックや疑問点等を随時学生に割り振っていくやり方が採られていた。それにより、授業の文脈の中で発生した学生・教員双方の内発的関心に基づいた知的探求が行われた。</li> <li>● 議論をテーマに関連づけてまとめる教員の臨機応変の対応とそのための準備 議論中心の授業ではしばしば議論が拡散しテーマから逸脱しがちになるが、学生によれば、教員の巧みな問いかけやコメントによって、いつのまにか授業の主眼点（文化）に立ち戻っていた。学生達はこれを「有山マジック」と称していたという。教員自身、議論の方向づけは強く意識しており、しばしば自分の守備範囲を越えるテーマ内容や予想のつかない議論展開の中で、教員としていかに臨機応変に対応し、独自の深く啓発的なものの見方を提示できるかに毎時間苦心したと述べている。そのため、教員もまた、テーマについて自ら事前に調べ、考え、迷いながら授業に臨んでいたという。</li> </ul> <p>こうした授業のあり方が学生と教員による知の共同生成を可能にしたものと考えられる。ベストクラスの主旨に適うものとして本授業を選定したい。</p>					